

副詞「せめて」の意味と用法

仲 渡 理恵子

A Semantic Analysis of *Semete*

NAKATO Rieko

〈Abstract〉

This paper analyzes and considers the meaning and usage of “semete” from the Japanese written word corpus in contrast to “sukunakutomo”. As a result, “semete” is mainly placed in sentences and used in conversational sentences, and a wide range of nouns such as people, times, places, things, events, and feelings are taken as a minimum estimate, but with concrete quantitative expressions. In addition, 20 kinds of syntactic developments were found in “semete”. There are 10 types of syntactic developments that can be replaced with “sukunakutomo”, such as “adaptation assumption”, and there is a tendency that replacement is possible when the meaning of “speaker’s desire for someone other than yourself” is included. There are 8 types of syntactic developments that cannot be replaced with “sukunakutomo”, such as “desire B”. If “ego”, which is the “desire for the realization of the speaker’s actions”, appears in the sentence, replacement becomes impossible and there was a tendency for the usage to be “semete” only. It is necessary to proceed with the examination of “desire C” and “question” because it is difficult to judge the replacement with “sukunakutomo” from the syntactic development and the meaning of the sentence.

キーワード：日本語、副詞、せめて、少なくとも、構文的展開

1. はじめに

副詞「せめて」は、渡辺実や工藤浩によって、その分類や用法の研究がなされてきた。渡辺（2001）は、「せめて」を和英辞典で引くと「at least」とあるが、「せめて」は常に「at least（少なくとも）」であるわけではなく、「at most（多くとも）」でもあり得、例えば、「せめて半年で手を打ってくれませんか」や「せめて50キロまでやせたい」は、「最大限」の量が示されているが、「せめて」を使う話者の心理としては、「少なくとも」の感じで使っているので、「せめて」を最小限だと決めこむことは必ずしも正しくないと述べている。実際、『日本語大辞典』の「せめて」の項には、「最小限の願望を表す。少なくとも」とあり、『基礎日本語辞典』でも、「現状を否定するが、最低線のささやかな満足が得られるなら肯定するという、否定と肯定が背中合わせになっている語。『少なくとも』と

甚だ近い発想と言える」と記載されている。これらの点からも、「せめて」は「少なくとも」と関連が深い副詞ではあるが、それらの使い分けが明確にされているとは言いがたく、特に日本語学習者にとっては、その意味や用法の違いに戸惑いを覚える可能性も否定できない。

2. 先行研究における「せめて」と問題の所在

渡辺 (1957) は、「せめて」を「ある語の表す素材概念を限定し、その素材に対する話し手の価値評価を表す、言わば概念誘導の副用語＝限定副詞」と定義している。しかし、渡辺 (1971) では、「誘導関係における誘導対象は、何も一つの叙述内容に限るわけではなく、単なる素材概念を誘導とする＝誘導副詞」と再定義している。

さらに、渡辺 (2001) は、「せめて」を「せめて Q (Quantity) ぐらいは希望したい」とモデル化し、Q は必ずしも数量を伴うわけではなく、「話者が自分の希望を引き下げるぎりぎりの譲歩の限界点」を示す言葉であると述べている。「譲歩」は性質上、小の方向へなされることが多く、「最小限」を表すことが圧倒的に多いが、大の方向への譲歩もあり得、その場合、述語は「減退動詞」になることが普通だとしている。そして、例文を検証し、「せめて」の構文的展開を明確にしている。「(順接仮定) せめて娘が生きていてくれれば (たら)」「(願望) せめて 50 キロまでやせたい」「(肯定) せめて 50 キロまでやせてみせます」「(意志) せめて 1 日 2 時間ぐらいは本を読もう」「(命令) せめてシャツぐらい着て出なさい。失礼ですよ」の 5 種は展開できるが、「(順接確定) ×せめて娘が生きていてくれるから」「(逆接仮定) ×せめて娘が生きていてくれても」「(逆接確定) ×せめて娘が生きていてくれるが」「(様態) ×せめて 50 キロまでやせそうだ」「(否定) ×せめて 1 日 3 回歯を磨かない」「(過去) ×せめて 50 キロまでやせました」「(推量) ×せめて半年は住むだろう」「(疑問) ×せめて半年で手を打ってくれますか」の 8 種は展開できないとしている。

一方、工藤 (1977) は、「文中の特定の対象 (語句) を、同じ範列に属する他の語とどのような関係になるかを示しつつ、範列語群の中からとりたてる機能をもつ副詞＝限定副詞」と定義し、「少なくとも・せめて・せいぜい・たかだか・たかが」を「見積り・評価」に分類している。そして、「せめて」は後接する名詞や、数量の部分「最低限の見積り」としてとり立て、述語は希望、命令、依頼、意志、当為など、広義の願望にほぼ限られるとまとめている。

また、林 (2012) は「せめて」を史的観点から明らかにしているが、「せめて」のみの研究に留まっており、「少なくとも」と関連付けた研究は、日本語学習者にとっても不可

欠だと思われるにもかかわらず、ほとんどなされていない。

そこで、本研究では、渡辺（2001）の「せめて」の意味と構文的展開を基準とし、例文における「せめて」は「少なくとも」と置換可能かという観点から、「せめて」の意味と用法の分析、考察を行うこととする。

3. 調査の対象と方法

今回の調査は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）BCCWJ-NT』の『中納言コーパス検索アプリケーション』を用い、「せめて」が含まれる文を、新聞、白書、書籍、法律、広報誌、教科書より無作為に抽出し、それを基に100例文の分析を行った。これ以下の例文は、『中納言コーパス検索アプリケーション』からの引用であるが、例文中の下線は筆者によるものである。

4. 分析と考察

4.1. 「せめて」の配置と後接する語

「せめて」が文のどこに配置されているかを分析した結果、文頭36例、文中62例、挿入2例であった。文中が文頭の約2倍という結果から、「せめて」は文中に多く配置される副詞であると言える。

さらに、2.で触れたように、工藤（1977）は「せめて」は後接する名詞や、数量の部分を「最低限の見積り」としてとり立てるとしているが、具体的にどのような語なのかを明らかにするため、後接する語について分析を行った。結果を【表1】に示す¹。品詞は名詞が99例で、動詞が1例であった²。名詞では、「人、人名」が19例あり、最も多かった。次ぐ「時間、期間」は数詞表現を伴う語が5例、伴わない語が6例であった。最小限、最大限という意味からも、数字表現が目立つと思われたが、「回数」「人数」「個数」「金額」を含めても15例と多くはなく、「年齢」や「割合」は皆無であった。数字表現を伴わない例は「場所」が9例、「物」が8例と続くが、「気持ち」や「金銭」「規則」などが後接するのは、興味深い。これは、「せめて」が基本的に希望を意味することから、「気持ち」や「金銭」「規則」に対して、願望があるからだと考えられる。また、会話文中に「せめて」が使われている用法が42例あったことから、話しことばとして、会話で使われる語でもあることも関連していると考えられる。

以上のことから、「せめて」は「会話文中で使われることがあり、人や時間をはじめとして、場所、物、出来事、気持ちなど幅広い名詞を最低限の見積りとしてとり立てるが、具体的な数量表現は伴わないことが多い」とまとめることができる。

【表 1】「せめて」に後接する語

品詞	後接する語
名詞 (人、人名)	自分(1)、者(1)、兄貴(1)、母親(1)、子供(1)、若手(1)、遺族(1)、 全員(1)、教師(1)、知事(1)、教団員(1)、顧問格(1)、関(1)、写楽(1)、 刑部(1)、おしげ(1)、秀頼(1)、青木(1)、フロレンツィア(1)
名詞 (時間、期間)	毎日 5 分間(1)、2,3 日(1)、あと二三か月後(1)、あと二日(1)、あと 一分(1)、生きている間(1)、あとしばらく(1)、食事の直前(1)、週末 (1)、練習の時(1)、休日(1)
名詞 (回数)	年に一度(1)、一年に一度(1)、週に二～三回(1)、一口(1)、一度(1)
名詞 (人数)	二人(1)、百人(1)
名詞 (個数)	一つ(1)、二つ目(1)
名詞 (金額)	一千万円(1)
名詞 (場所)	日本(1)、高層ビル街(1)、御仏前(1)、タンスの引き出し(1)、主要幹 線(1)、住宅(1)、森(1)、席(1)、甲子園(1)
名詞 (物)	カップ(1)、書置き(1)、靴のヒモ(1)、電話(1)、花たち(1)、参考論 文(1)、錦紗(1)、パンプス(1)
名詞 (気持ち)	思い(1)、ストレス(1)、親切(1)、幸せ(1)、お気持ち(1)、気持ち(1)、 御機嫌(1)
名詞 (出来事)	交流(1)、遅刻(1)、手術(1)、出家(1)、凶作の有無(1)、予見(1)
名詞 (金銭)	資金調達(1)、小判(1)、原稿料(1)、食い扶持(1)
名詞 (規則)	ルール(1)、日米地位協定(1)、憲法の前文(1)、規律(1)
名詞 (言葉)	言葉(2)、汚辱や誹謗(1)
名詞 (指示詞)	それ (2)
名詞 (その他)	姓名(1)、威厳(1)、大事なこと(1)、方法(1)、仕事(1)、住生活(1)、 科学調査(1)、書くこと(1)、始めること(1)、心身(1)、歌(1)、罪(1)、 健康チェック(1)、本名(1)、十二球団(1)、目次(1)
動詞	食い止めよう(1)

4.2. 「せめて」の意味

『現代副詞用法辞典』の「せめて」の項には、「最低限の確保を希望する様子を表す。ややマイナスよりのイメージの語。本当はもっと多くを望みたいところなのだが、最小限で我慢せざるを得ない慨嘆の暗示がこもる」と記載がある。しかし、2. で示したが、渡辺(2001)は「せめて」は最小限だけでなく、最大限でもあり得るとし、その場合、述語は「減退動詞」になると述べている。今回、最小限の意味と捉えられるものは 96 例あり、最大限の意味と捉えられるものは 4 例あった。このことから、「せめて」は 9 割以上、最低

限の意味で使われると言える。

- (1) 国王の弑逆を謀ることは、あらゆる罪の中でももっとも罪深い。たとえ死んでも汚名が残る。そんな罪をどうして認められるものか。今になってサーマイルを救えるとは思わなかった。それでも、謂れのない罪で咎を増すようなことはしたくないのだ。せめて汚辱や誹謗からは遠ざけてやりたい。

『アダルシヤンの花嫁』雨川恵著（2004）

- (2) 稲原は、葬儀委員長を頼まれると、神戸市灘区の灘署に赴いた。灘署の署長は、困惑した顔で言った。「稲原会長、出席者を、せめて全国で百人に制限してもらえませんか」「百人というわけには…しかし、各組出席者を五人以下に押さえることは約束いたします」稲原は、約束したとおり、各組出席者を五人以下にも押さえるよう通達を出していた。

『修羅の群れ』大下英治著（1984）

- (3) 私はもう日本に帰ることはないので、あなたのおばあさまのお墓に行くことも、その前に立って祈ることもできませんが、せめて思いだけはお伝えしたくて、彼女の魂にこれを捧げます。

『花響』稲葉真弓著（2002）

- (4) 少女の目がすっと細まり、引き金を引くだけの覚悟はあると伝えるのを見た。征人は、抵抗という選択肢が指の間をすり抜けてゆくのを感じた。征人は小刻みに首を横に振り、せめて言葉がわからないと伝えしようとした。

『終戦のローレライ』福井晴敏著（2002）

(1)～(4)は最大限と捉えられた例である。(1)の「遠ざける」(2)の「制限する」という動詞は「減退動詞」と判断できる。(3)(4)は共に「伝える」という動詞を使っているが、(3)は「私は帰国できないし、墓に行くことも祈ることもできないが、そんな状態の中で最大でできることとして思いを伝える」という意味であり、(4)は「征人は少女に殺されそうな極限状態にあり、抵抗も諦めたが、最大限できることとして言葉がわからないと伝える」という意味である。これらは「減退動詞」ではないが、「何もできない状態で最大限できる行為＝伝える」という意味から、動詞「伝える」も最大限の用例として使用できる可能性が伺える。

4.3. 「せめて」の構文的展開

2. で述べたように、工藤 (1977) は「せめて」の述語は「希望」「命令」「依頼」「意志」「当為」の 5 種、渡辺(2001)は「順接仮定」「願望」「肯定」「意志」「命令」の 5 種として
 いるが、今回それら以外に、「当然」「使役」「忠告」「名詞」「変化」「目的」「試み」「方法」
 「疑問」があり、計 20 種の構文的展開が見られた³。

4.3.1. 「少なくとも」と置換可能な構文的展開

【表 2】「せめて」の構文的展開 (1)

構文的展開	文型
順接仮定	+N には V れば、V(1)/+N (期間) V れば、V たのに(1)/+V ぐらいであれば、N で(1)/+N さえ V ていれば(1)/+N ぐらい V ば A のに(1)/+N でも V ば(1)/+N を V れば、A た(1)/+N を V なければ、V(1)/+N (回数) V なければ、V ない(1)/+V たら、いかがでしょう(1)/+V まで V たら(1)/+V たら、A だろう(1)/+N と V ていられたら(1)/+N でも V たら、V けど(1)/+V たら、V ればいいのに(1)/+N に V なら、V たでしょう(1)/+V ないと、V(1)/+V と、A たのだけど(1)/+V た場合は、V ない(1)
願望 A	+N だけは V てほしい(3)/+V てほしい(2)/+N だけでも V てほしい(1)/+N ぐらいには V てほしい(1)/+N がほしい(1)/+N を V てほしい(1)/+N から V てほしかった(1)
依頼 A	+N くらいは V て下さい(1)/+N (時) くらいは V て下さい(1)/+N には V て下さい(1)/+N (人数) に V てもらえませんか(1)/+N は V ませんか(1)
当然	+N では V べきだ(1)/+N を V べきだ(1)/+V ように V べきだ(1)/+V べきだ(1)/+N を V べきだった(1)
使役	+N は V させる(1)/+N だけは V させたかった(1)
忠告	+N (期間) N だけでは V ないようにしましょう(1)/+N (時) だけは V ないように(1)
当為	+N を V ねばならない/+N だけは V なければ(1)
名詞	+N (期間) くらいは(1)/+N (人数) (1)
変化	+N が V ようになる(1)
目的	+V てのためだった(1)

「少なくとも」に置換可能と判断できる文は、49例であった。【表2】はその構文的展開である⁴。各構文的展開を例文とともに分析する。表中の「+」は「せめて」、Nは名詞、Vは動詞、Aは形容詞・形容動詞を表す。

<順接仮定>

- (5) 「金本佐知子さんと同じN女子大の子が殺されたという記事を見て…。あの子が一めぐみが可哀そうだったんです。せめて、兄が無実だったと自分で信じていられたら…。ずいぶんあの子の気持も楽になるだろう、と思って」「そうですか」

『三毛猫ホームズの世紀末』赤川次郎著（2004）

- (6) メジャーに移ったその年に、いきなりシーズン二百本安打の快挙を成し遂げてしまった彼に、当然日本から押しかけた大勢のマスコミがマイクを向けて感想を聞きました。「大変な記録ですね。今のお気持ちをお願いします」「お気持ちをお願いします」という日本語は、よく考えるとおかしいんですね。「お気持ちを教えてください」か、せめて「お気持ちはいかがですか」ぐらい言え**ば**いいのに。

『口のきき方』梶原しげる著（2003）

- (7) 「お前、もうちょっと条件を緩める気にはならないかい。たとえば、せめて、自分が先に死んだ場合はのちぞいを一生めとらないとか。あるいは自分より美人の女とは再婚しないとか…。その程度の条件なら、うんと言う者もいるだろうに」「いやですわ、いくらお父さまのご命令でも、それだけは」と、王女はけんもほろろに突っぱねるのだった。

『本当は恐ろしいグリム童話』桐生操著（1999）

条件における「順接仮定」は最も多く、19例あった。会話文での使用が目立ち、文型は「せめてVたら（れば/なら/と/場合は）」とまとめられる。(5)は、「せめて兄が無実だったとめぐみが自分で信じていられたら、事態は変わっていたのに」という後悔の念が表れ、(6)も「せめてマスコミはこのように言え**ば**いいのに、言わない」という批判的な意味を含む。また、(7)は助詞「とか」を用い、例示を表しているが、(5)～(7)は、話者が妹に、マスコミに、王女にと、いずれにしても「自分以外の人に対する話し手の願望」となり、その場合に「少なくとも」への置換が可能になると考えられる。

<願望 A>

(8) コンビニの駐車場に、車の灰皿の中身をすべて捨てていったような形跡を見かける。汚いと思うし、常識がないと思う。その後、店員が掃除しているのを悪いと思わないのだろうか。タバコを吸う人がいるのは仕方がないが、せめてルールを守って吸ってほしい。 『広報あいこうか』滋賀県甲賀市 (2008)

(9) それでも、竹島の婿養子に入るといふ石野の希望を知るとみな納得せざるを得ない。岸佐左衛門や畑勘右衛門からは、「せめて顧問格として残って欲しい」といふ発言もあったが、石野は断固として断った。 『峠の群像』堺屋太一著 (1982)

(10) 父は、一度も手紙をよこさなかった。面会にも来なかった。手紙も面会も、禁じられていたのだ。母は、安心して寄りかかることのできる広い胸、それがかなわなければ、せめてやさしいことばがほしいと切実に思った。ただ、電話だけは許されていた。 『ワイルド・スワン』ユン・チアン著 土屋京子訳 (1993)

「願望」は 3 種に分類できたので、こちらは「願望 A」とする。10 例あり、文型は「せめて V てほしい」であるが、(8) はタバコを吸う人に対して、(9) は岸佐左衛門や畑勘右衛門が石野に対してと、自分以外の人に対する願望となり、「少なくとも」と置換が可能になると言える。(10) は「せめて V てほしい」であっても、「切実に思った」といふ表現が母自身の願望であるので、「少なくとも」への置換は不可であると判断できる。

<依頼 A>

(11) まだ、子供が小さいうちは刃物を使わせるのが怖いというお母さんも多いかもしれません。しかし、せめて靴のヒモくらいは自分で結ばせてください。 『学力は家庭で伸びる』陰山英男著 (2003)

(12) 稲原は、葬儀委員長を頼まれると、神戸市灘区の灘署に赴いた。灘署の署長は、困惑した顔で言った。「稲原会長、出席者を、せめて全国で百人に制限してもらえませんか」「百人というわけには…しかし、各組出席者を五人以下に押さえることは約束いたします」稲原は、約束したとおり、各組出席者を五人以下にも押さえるよう通達を出していた。 『修羅の群れ』大下英治著 (1984)

「依頼」は2種に分類できた。「依頼 A」は5例あり、「せめてVてください（もらえませんか）」という文型である。渡辺（2001）は、単独では「否定」と「疑問」は「せめて」となじまないが、二つ組み合わせられると意味が変化するので、なじむと述べている。(12)がその用法であり、「否定+疑問=依頼」となっている。(11)はお母さんに、(12)は稲原会長にと、他者に対する願望であるので、「少なくとも」への置換が可能と判断できる。

<当然>

(13) 結局のところ、たかだか教師になる方法を教えられるだけじゃないのか。そういう意味で、教育というのはなかなか矛盾した行為なのです。だから、俺を見習えというのが無理なら、せめて、好きなことのある教師で、それが子供に伝わる、という風にはあるべきです。 『バカの壁』養老孟司著（2003）

(14) 当時、マッカーサーが日本人に対し「精神年齢十二歳」と言いましたが、私に言わせれば、当時のアメリカの精神年齢は十歳くらいで、歴史的な予見性もなく、あのように稚拙な原典からの翻訳しかできなかった。当時の彼らはせめて、ペリー提督の報告の中にある予見を読み直して翻訳すべきだった。

『それでも「No」と言える日本』石原慎太郎著（1990）

「～するのが正しい」という「当然」は5例あり、「せめてVべきだ/だった」という文型である。(13)(14)は、「当然」という構文を用いながら、他者の行為への願望について述べているので、その点で、「少なくとも」への置換が可能である。

<使役・忠告・当為・名詞>

(15) 「内田なんか、ハウスに近寄りもしないし」「内田君は元々東京の人間だろう。東京公演の間ぐらい自宅から通うのは当然さ」「じゃあせめて独身の若手はハウスで合宿させるとか」「それも個人の自由。公演は二ヶ月の長丁場なんだから、一人になる時間は必要なの」 『空中ブランコ』奥田英朗著（2004）

(16) まずはお腹をぐっと引き締めましょう。せめて毎日五分間、鏡の前だけではぎゅっとお腹をひっこめてみともなくないようにしましょう。

『あの橋の向こうに』戸梶圭太著（2003）

(17) したがって、川を埋めて道路にしたのは間違いであったのだが、だからといって、いまから都市内に川や池を増やすのは至難である。せめて高層ビル街に広い空間をつくって、水場を設けることをやらねばならない。

『技術社会関係論』森谷正規著 (2002)

(18) 「夜が明けても、しばらくここにいない？」ソフィーは尋ねた。「せめて二、三日くらいは」ラングドン息を深くついた。これ以上何を望むというのか。「きみはしばらくここで家族と過ごせばいい。わたしは朝のうちにパリへもどるつもりだ」ソフィーは失望の表情を浮かべたが、納得したらしかった。

『ダ・ヴィンチ・コード』ダン・ブラウン著 越前敏弥訳 (2004)

「使役」「忠告」「当為」「名詞」は各 2 例ずつであった。(15)「使役」は「せめて V させる／たかった」、(16)「忠告」は「せめて N (期間/時) は V ないように (しよう)」、(17)「当為」は「せめて V ねば (ならない)」という文型になるが、これらも他者への働きかけという意味が含まれる点で、「少なくとも」への置換が可能となる。(18)「名詞」は「せめて N (期間/時)」であるが、「せめて二、三日くらいは (ここにいてほしい)」という「願望 A」と同文型になるので、置換可能である。

「変化」「目的」は 1 例ずつであったため、参考に留める。

4.3.2. 「少なくとも」と置換不可な構文的展開

「少なくとも」に置換不可と判断できる文は、42 例であった。【表3】はその構文的展開である。

<願望 B>

(19) 私はいずれ兵隊にとられ、天皇の名のもとに、敵のタマに当たってひっそりと死んでしまうことになるだろうと思っていた。どうせ死んでしまうのだから、せめて生きている間ぐらひは、この世に生きていたあかしを立てておきたいと願った。

『氣くばりのすすめ』鈴木健二著 (1982)

(20) 私は貴方が好きだった。幸福になれる日を夢見ていた。それなのに私から去ってしまった。私の手のとどかない所へ行ってしまった。私はうらみはしない。しかしせめてあと、二、三ヶ月後、あなたの婚約を知りたかった。自分の悲しみが少しは癒

えてから。

『石垣島失踪事件』石垣用喜著（2001）

- (21) 気づかずに迷惑をかけているのが人生であるから、せめて自分のできる限りの親切を心掛けたい。婦人の親切は婦人の亡くなった後も四季の花となって生き続けているのである。
『人生汗と涙と情』浅尾法灯著（1984）

「せめて V たい/たかった」を文型とする「願望 B」は、21 例あった。「願望 A」の「自分以外の人に対する話し手の願望」とは異なり、(19)～(21)は「話し手の行為の実現に対する欲求」である。この「自我」が文意に表れた場合、「少なくとも」に置換不可の傾向が見られると考えられる。

【表 3】「せめて」の構文的展開（2）

構文的展開	文型
願望 B	+N を V たい(4)/+N だけでも V たい(3)/+N ぐらいは V たい(2)/+N は V たい(2)/+N だけは V たい(1)/+N（期間）は V たい(1)/+N（時間）V たい(1)/+N のままで V たい(1)/+V させていただきたい(1)/+V ようにしたい(1)/+N には V たかった(1)/+N だけでも V たかった(1)/+N でも V たかった(1)/+N を V たくなかった(1)
肯定	+N を V(3) /+N を V(1)/+N（回数）は V(1)/+N に V(1)/+N だけでも(1)V/+N だけでも A(1)
試み	+N に V ようとしている(1)/+N（時）に V ようとする(1)/+V ないように(1)/+V ようと V た(1)/+V ようとした(1)
依頼 B	+V てもらえないか(1)/+V てくれない?(1)
否定的意志	+N を V まい(1)/+N（期間）N だけは V まい(1)
方法	+V させ、V しかない(1)/+N を V ほかなかった(1)
命令	+N を V なさい(1)
意志	+V ことにしよう(1)

<肯定>

- (22) 別におぼえようとしなくても、とにかく、必ずテキストに目をふれさせてやりましょう。それもむずかしい日には、せめて目次だけでも見ておくだけで、だいぶちがいます。なぜならこの持続は、意識、意欲の持続、記憶の定着および固定化の二つの効果をもたらすからです。
『記憶力 30 秒増強術』椋木修三著（2002）

(23) 信明は衝撃を受けた。では、自分は何のために甦生したのか。自ら屍鬼を招くような振る舞いをしたことの意味は。「痛みは止まったろう。せめてそれを感謝するんだね」実際、あの痛みは止まっていた。けれども代わりに疼痛に似た飢餓があった。

『屍鬼』小野不由美著 (2002)

(24) <せめて木下組の規律を正しくし、京の市中を平穩にすることや…> 小一郎はそう結論し、配下の将兵に対する監督を強めると共に、市中巡察などを強化させた。

『豊臣秀長』堺屋太一著 (1985)

「肯定」は 8 例あり、「せめて V/A」という形である。(22) のように「だけでも」と限定を表す助詞が使われることもある。「肯定」は言い切りの形の場合、話し手自身の意志表現でもあるので、「少なくとも」に置換不可と言える。

< 試み >

(25) 息子がいったように、私も彼よりも何十年か前に三十歳を迎えた時、ある時あるきっかけで外形からも歴然と自分の肉体が老いてきたと覺り、なんとかそれを取り戻そうと、いやせめて 食い止めようと走りだしたものだ。

『老いてこそ人生』石原慎太郎著 (2002)

(26) 私自身、見る人を楽しませだけの、華も芸もないことはよく知ってましたから—せめて、与えられた役の人の気持ちをよく考え、台詞をおぼえ、時間を守り、病気をしてまわりの人に迷惑をかけないように…ただ、いっしょうけんめいやってきただけ…

『老いの道づれ』沢村貞子著 (1995)

動作・行為を実現しようと努力したり、試みたりすることを表す「試み」は 5 例あり、「せめて V (ない) ようとする」という文型である。試みという意味は「～しよう」という願望につながるが、(25)(26) 共に話し手自身の願望であり、「自我」が含まれるため、「少なくとも」には置換不可と判断できる。

< 依頼 B >

(27) 「そんな！二千万以上したのよ！」「お気の毒ですが。一よそをお当りになりますか？」
婦人の方は、しばらくためらっていたが、「—いいわ。とてもそんな時間、ないの」

と、ため息をついた。「せめて…一千万円で買ってくれない？」「ふむ」

『盗みに追いつく泥棒なし』赤川次郎著（1987）

- (28) 停車場司令官の大佐に会い紹介状を示し窮状を訴えた。汽車は出せないという。とても歩けないし、食も宿もない。途々匪襲を防ぐ方法もない、いずれ全員が殺されるか死ぬにきまっているのだから、せめて全員銃殺してもらえないか。

『満州崩壊』榎本捨三著（2005）

「依頼 B」は 2 例で、「せめて V てくれない(もらえないか)」という文型であるが、(27) 及び (28) を「少なくとも一千万円で買ってくれない？」、「いずれ全員が殺されるに決まっているのだから、少なくとも全員銃殺してもらえないか」のように「少なくとも」に置き換えることは不可である。これは、両者とも「自我」の意が含まれるからだと推察でき、「依頼 A」とは分けて考える必要性がある。

<否定的意志・方法>

- (29) こちらも食うのに精一杯で、せめて年に一度の年賀状だけは欠かすまいと書き続けましたが、昭和三十九年でしたか、喪中を知らせる葉書が届き、亡くなったのを知りました。

『安楽病棟』帚木蓬生著（2001）

- (30) 最も指導に苦勞するのは、勉強嫌いで怠学の生徒である。実習が授業の大半を占める専修学校では、欠席が多いということは致命的である。せめて遅刻してでも登校させ、課題が終了するまで指導するしかない。フレックスタイムの登校もやむなしといった状況にある。

『児童福祉』南本きよみ著（2001）

(29) は「～しない」という話し手の「否定的意志」であり、文型は「せめて V まい」となる。「否定」単独では「せめて」となじまないが、4.3.1. <依頼 A>で述べたように、「否定+意志=強い意志」と意味が変化するので、構文的展開は可能と考えられる。(30) の文型は「せめて V しか (ほか) ない」で、「そうするだけで、他に方法がない」という意味であるが、他に可能性がないからしかたがないという諦めの気持ちではなく、「この方法のみで行う」という意志を感じる。(29) も (30) も話し手の強い意志が表れているので、「少なくとも」に置換しにくいと言える。

「命令」「意志」は 1 例ずつであったため、参考に留める。

4.3.3. 「少なくとも」との置換の判別が難しい文

「少なくとも」に置換可能かどうか、判別が難しい例は 9 例あった。【表4】はその構文的展開である。

【表 4】「せめて」の構文的展開 (3)

構文的展開	文型
願望 C	+N からは V てやりたい(1)/+N に V てやりたい(1)/+N から V てやろう(1)/+N ことに V てやりたかった(1)/+V ようにしたいものだ(2)/+V たいものである(1)
疑問	+N でもないだろうか(1)/+N (回数) は V ているか(1)

<願望 C>

(31) 熊に付いている血は被害者のものにちがいない。通りすがりの者にすぎないが、せめて被害者の遺族に返してやりたくて、こうしてその身許を探しているとまことしやかに話した。事務長は、新見の話を信じたらしい。

『人間の証明』森村誠一著 (1977)

(32) 自分のルーツに戻って、親との問題が、自分の物事のとらえ方や、周囲の人との接し方に悪く影響していないか、常にチェックしてください。親が障害にならないように、または親の障害にならないように、親と自分の魂の透明度を同じレベルに保てるようにしてください。せめて同じくらい幸せでいられるようにしたいものです。

『自分のまわりにいいことがいっぱい起こる本』原田真裕美著 (2004)

「願望 C」は二通りあり、まず (31) のように、目下の人や動物のために、話し手が何かの行為をする「せめて V てやりたい」という文型である。「V たい」という「自我」を表す文型であるものの、「願望 A」の「自分以外の人に対する話し手の願望」に近い用法であるが、「少なくとも被害者の遺族に返してやりたくて」と置き換えると違和感を覚える。もう一つは、(32) の文型「せめて V たいものだ」である。一般論を意味する「ものだ」が文末に展開するので、一般化することで、「自我」の意味は弱まるとも考えられるが、置換した場合、「少なくとも同じくらい幸せでいられるようにしたいものです」が、文として成立するか、判断に迷いが生じる。

<疑問>

(33) 遠く離れて暮らしていても、せめて週に二～三回は電話をしているか、手紙を出しているか、それは何でもないので実はとても大切なことなのだ。

『ボケてたまるか!』金子満雄著(2003)

(34) 姿が見えないのは百発百中家出にちががなく、辿りついて襖を開けると、案の定、蒲団は片づけられている。日頃せきの部屋へは入らないので、勝手は判らないが、せめて書置きでもないかと、鏡台、小箆のなかを片っぱしから開けてみたが、それらしいものは見あたらなかった。

『蔵』宮尾登美子著(1993)

2. で述べたが、渡辺(2001)は「疑問」は「せめて」の構文的展開では見られないとしている。(33)は「せめてN(回数)はVているか」という文型であるが、「週に二～三回は電話をしているか、あるいは手紙を出しているか」という例示であり、4.3.1.<依頼A>で述べたように、「疑問+例示=例示」と考えられ、意味も他への働きかけであることから、「少なくとも」への置換が可能とも言える。(34)は「せめてNでもないか」でこちらも「疑問」であるが、「家出に違いないので、せめて書置きでも残していないだろうか」という意味から、「疑問+推量」=「せめて書置きでもあってほしい」という「願望A」になるが、「自我」が含まれるので、「少なくとも書置きでもないかと」と置き換えると違和感を覚える。

5. おわりに

今回の調査において、「せめて」は主に文中に配置され、会話文で使われ、人、時間、場所、物、出来事、気持ちなど幅広い名詞を最低限の見積りとしてとり立てるが、具体的な数量表現は伴わないことが多いとわかった。また、「せめて」は最小限に限らず、最大限でもあり得るが、実際は9割以上、最小限の意味で用いられており、最大限として用いられる場合の動詞は「減退動詞」に加え、「伝える」も使うことができる可能性が伺えた。

構文的展開では、工藤(1977)や渡辺(2001)が示した以外に、「当然」「使役」「忠告」「名詞」「変化」「目的」「試み」「方法」「疑問」の構文的展開が見られた。「少なくとも」と置換可能な構文的展開は、「順接仮定」「願望A」「依頼A」「当然」「使役」「忠告」「当為」「名詞」に加え、「変化」「目的」も構文的展開になり得る可能性が伺えた。これらには、「自分以外の人に対する話し手の願望」の意が含まれる場合に、置換が可能となる傾向が見られた。「少なくとも」と置換不可となる構文的展開は、「願望B」「肯定」「試み」「依

頼 B」「否定的意志」「方法」で、「命令」「意志」も含まれる可能性が見られたが、「話し手の行為の実現に対する欲求」である「自我」が文意に表れた場合、置換が不可となり、「せめて」のみの用法となる傾向があった。「願望 C」及び「疑問」は、構文的展開からも、文意からも、「少なくとも」との置換に判断がつかず、検討を進める必要性がある。

このように、今回「せめて」の意味と用法の一部が明らかとなり、日本語学習者への提示方法が見えてきたが、今後は、「せいぜい」「たかだか」「たかが」「最低」といった類似表現の分析も進めていきたい。

〈注〉

- 1 名詞修飾節の場合、筆者の判断で被修飾語を後接の語としたものも含む。
- 2 「親切」「幸せ」「書くこと」「始めること」などは、形態から名詞に分類した。
- 3 構文的展開は 1 例文につき、1 種類ではなく、2、3 種含まれるものもあったが、その場合は、「せめて」がかかる修飾語部分を構文的展開とした。
- 4 分類は『教師と学習者のための日本語文型辞典』(1998)に基づく。

〈参考文献〉

- 林禎映 (2012) 「副詞「せめて」の意味変化」『日本語学論集』第八号 pp.158~174 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
- 梅棹忠夫、金田一春彦、阪倉篤義、日野原重明監修『講談社カラー版日本語大辞典 (第二版)』(1995) 講談社
- 工藤浩 (1977) 「限定副詞の機能」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』pp.969~986 明治書院
- 工藤浩 (2016) 『副詞と文』ひつじ書房
- 砂川有里子他 (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 日本語文法学会編 (2014) 『日本語文法事典』大修館書店
- 飛田良文・浅田秀子 (2018) 『現代副詞用法辞典 新装版』東京堂出版
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 森田良行 (2002) 『日本語文法の発想』ひつじ書房
- 渡辺実 (1957) 「品詞論の諸問題—副用語・付属語」『日本文法講座 1』明治書院
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』塙書房
- 渡辺実 (1974) 『国語文法論』笠間書院
- 渡辺実 (1983) 『副用語の研究』明治書院
- 渡辺実 (1996) 『日本語概説』岩波テキストブックス
- 渡辺実 (2001) 『さすが！日本語』ちくま新書

〈例文出典〉

『現代日本語書き言葉均衡コーパス (通常版) BCCWJ-NT』大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立国語研究所